「地の塩、世の光」（マタイ五章一～一六節）

1　山上の説教

コロナの第七波ということで、不安の中にある私どもですが、注意を怠らず、礼拝を守っていきたいと願っています。

多くの学校が夏休みに入っています。この期間、今日から四回の日曜日、私どもキリスト教学校の日として礼拝をささげたいと思っています。キリスト教学校で学ぶ生徒さん、学生さんにも参加していただき、学校と協力しながら福音を宣べ伝える、キリストを証しする、そうした教会として、今年も歩んで行きたい、そのために祈る期間としたいと思います。

コロナのこともあり、特別なことは今年もいたしません。この間、礼拝中心にならざるをえません。説教予定としては私が三回担当し、最後の八月一四日は尚絅学院宗教主任の田所義郎先生にお願いしてあります。

今年は、私は、イエスの山上の説教の中から聖書箇所を選んで、話をしたいと思っています。今日は少し長く聖書をお読みしました。最初の部分は全体にとっても大切なので、そういたしました。

山上の説教の中から聖書を選びたいと申しましたが、この〈山上の説教〉というのは、マタイによる福音書、五章から七章まで、三章にわたって書いてあるイエスの教えのことです。

この中には、例えば〈狭い門から入りなさい〉とか〈敵を愛しなさい〉とか、あるいは、今日の説教題の〈地の塩、世の光〉もそうでしょうか、聖書を知らない人でも、キリスト教を知らない人でも知っているような、耳にするような言葉が、いくつもあります。じっさいここには、イエスの教えの、まさに精髄が示されているといってよいのです。

いま〈教え〉といいましたが、山上の説教の場合、この教えは神についてとか、人間の本質とは何かとか、あるいは救いについてとか、難しいことではなくて、もちろんそうしたことが背景にはあるわけですが、ふつう倫理とか、道徳とかいわれる領域に関係するイエスの教えです。

倫理、道徳というのは、人間の行いに関わることです。人はどのように行えばいいのか、どういうことをしていけないのか、何が善くて、何が悪いのか、その基準は何か、それが倫理とか道徳の問題です。

こうした〈人はどのように行えばいいのか、どういうことをしてならないか、何が善くて、何が悪いのか〉といった問いに、聖書は、キリスト教はどのような答えをもっているのだろう、そもそもイエスは、それをどのように考え、どのように教えられたのであろう、それが山上の説教の内容で、イエスご自身が、これを人々に語ったのです。ただ、今日の聖書箇所は、そうした内容の本論に入る前の、いわば序論のようなところです。いま言ったようなことは出てきません。

今日の箇所を取り上げる前に、もう一つ注意しておきたいことがあります。それはイエスはだれに対して語っているのかということです。最初のところ、もう一度読んでみます。

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を降ろされると、弟子たちが近くに寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、教えられた（一～二節）。

〈だれに対して語っているのか〉という問いの答えがここにあります。私にはとても面白い情景です。

イエスにはすでに大勢の群衆が付き従っていました（四・二五）。イエスが、話をするため山に登って腰を降ろすと、群衆の中から、するするっと、弟子たちが近寄ってきたというのです。

イエスには弟子が一二人いました。ご存じの通りです。ただこの段階では、まだペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネの四人しかいませんでした（四・一八）。彼らはみな漁師でした。イエスの招きに彼らは従ったのですが、そのさい、「網を捨てて従った」と書いてあります（四・二〇）。生業（なりわい）を捨て、退路を断って従って行ったのです。

この弟子たちが近くに来たからといって、彼らだけにイエスは語ったのではありませんでした。イエスの周りに集まっていた群衆も聞いていました。弟子たち、そして群衆が、ここでのイエスの聞き手です。彼らを、山上の説教の中でイエスは、一貫して「あなたがた」と呼んでいます。

こうしたイエスと聞き手の関係は、いまの私どもの教会と少しも変わらないといってよいのではないでしょうか。

イエスの言葉を聞こうとして私どももこうして集まっています。必ずしもみんなが弟子のようではありません。求道中の方もいます。キリスト教学校に学んでいるだけという人もいるでしょう。でもそれはあまり問題ではない。イエスの言葉に真実に聞こうとする人、イエスを主として従って行こうとする人、このすべての人に、イエスは語ってくださっているのです。

2　幸い、祝福

さて今日の箇所は、山上の説教全体の、いわば序論に当たるようなところだと申しました。ですからまだここには倫理や道徳に関わる教えは出ていません。むしろもっと基本的なことが語られています。それは、イエスに従う人々、キリスト者とはどのような存在かということです。

イエスは、目の前に集まった人々を祝福する、幸いを告げることから、語りはじめました。

当時これを聞いた人々が、どんな思いで聞いていたか、もちろん分かりませんけれども、いまこれを読む私どもにとって、この祝福の言葉には、少し驚かせることがあ

ります。ふつうは少しも幸いだと思われないことにも、幸いと祝福とが語られているからです。なぜそんなことが幸いなのだろう。なぜそんなことが、祝福に値するのだろう、ということです。

全体は、まことに印象深い聖句の数々です。じつはここに、幸いであるという言葉が九回出て来ます。

その中には、そのまま読んでも分かる、同意できるのもあります。例えば、その代表的なものは、「平和を実現する人々は、幸いである」です。戦争や争いの絶えないこの世界にあって、もし本当に平和をそこにつくり出す、実現する人がいたら、まことに幸いだからです。

同じことは、「憐れみ深い人々」についても、「心の清い人々」についてもいえるかも知れません。

しかし少なくとも最初の二つの幸い、祝福については、やはり理解しにくいところがあるのではないでしょうか。

心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである（三節）。
悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる（四節）。

じっさい分かりにくい言葉です。貧しい人は幸いだ、悲しむ人は幸いだとは、ふつうは考えないからです。しかしこんなふうに考えたら、少しは納得できるのではないでしょうか。

「心の貧しい人々」、ルカによる福音書では端的に「貧しい人々」です。この人たちは、当てにできる財産をもっていません。土地ももっていません。自分がそこに居場所をもつことのできる交わりもありません。そして何より、自らの心を支える力がどこにもないのです。それゆえ彼らは自分を召し出した方以外の何ものにももはや望みをかけることのできない人々です。しかしほんとうに神にのみ望みを置くとすればそれほど幸いなことはないのです。というのも、神様が、必ずこの人々を豊かにしてくれるからです。

「悲しむ人々」、彼らは世の人々が幸福や平安を見いだし、あるいは見いだそうとして走り出すところに、悲しみしか見いだすことはできません。なぜならそこに幸福の終わりしか見いだすことができないからです。しかしこのようにして悲しむ人々も幸いです。神の慰めが必ずあるからです。

もしそんなふうに考えてよいならば、これらの人々も、幸いでないように見えて、じつは幸いであることが分かります。人間の視点だけでなく、それを越えた神の視点がそこにあるのです。

3 地の塩、世の光

全部は取り上げることができません。しかし、はっきりしていることは、イエスがこの「心の貧しい人々」から始まる言葉をもって見ているのは、目の前の彼に従う者

たちだということです。

そしてそのことがはっきりすれば、一三節以下のイエスの言葉は、そのままでもよく分かるのではないでしょうか。

あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのようにあなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである（一三～一六節）。

「あなたがた」とは、イエスがさっき「心の貧しい人々は、幸いである」からはじまる祝福をもって語りかけた人々です。この人々は、心の貧しい人々です。悲しむ人々です。義に飢え渇いている人々です。憐れみ深い人々です。心の清い人々です。平和を実現する人々です。そして義のために迫害を受け、イエス・キリストのために言われなき悪口を浴びせられる人々です。

この人々が「地の塩」と呼ばれます。「世の光」と呼ばれます。その場合、注意したいのは、地の塩にならなければならないとか、世の光にならなければならないといわれているのではないのです。なりなさいとも、なるであろうとも、いわれているのではないのです。

心の貧しいままで、悲しむままで、義のために迫害されるままで、イエス・キリストのために言われなき悪口を浴びせられるままで、キリスト者は、すでに地の塩であり、世の光です。

私どもしばしば、このイエスの言葉を、地の塩であれ、世の光となろう、というような、一種の〈励まし〉として〈目標〉として受けとりがちです。キリスト教学校などでこの聖句がスクール・モットーなどとして掲げられるようなときには、そんなニュアンスが入りがちです。

しかし、そうではないのです。励ましでもないし、未来像を示しているのでもないのです。イエスに従いゆくとき、私ども、この世の価値とのあいだでさまざまな摩擦を経験せざるをえません。イエスはそれを知っています。そしてその中にある私どもに主は祝福を語ってくださるのです。

「地の塩」。塩は、それがどのようなものとして考えられるとしても、人間の生活にとって、この世にとって、まさしく不可欠です。それがなければ腐ってしまいます。また「世の光」。それがなければ、社会は目標を失うことでしょう。福音を、聖書の証しを高くかかげ、升の下になどに置いて隠してしまわないようにしなければなりません。山の上の町は隠れることはないのです。世の只中で礼拝をささげ、はばかることなく福音を証しし、教会が歩みつづけること、そこに教会の、私どもキリスト者の幸いがあり、祝福があるのです。

（二〇二二年七月二四日）